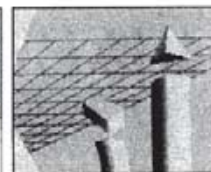


モノグラフ・高校生'89

vol. 27 高校生の金銭感覚



放送大学客員教授 深谷昌志

● 目次

要約とまとめ	2
第I章 テーマ設定	4
第II章 金銭とのかかわり	7
1. こづかいの額	7
2. 貯金の額	13
第III章 金銭とのふれ合い	18
1. 金銭の貸し借り	18
2. カードや通信販売	21
3. アルバイト	25
第IV章 金銭感覚をめぐって	29
1. 大金とは	29
2. 1か月の生活費	33
3. 将来の見通し	35
4. つきたい仕事	39
資料1 調査票見本	43
資料2 学年・性別集計表	56

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

要約とまとめ



① こづかいの額

中学生のこづかいは2,000円だが、高校生になると5,000円くらいになる(P.9図3)。

② 希望する額

高1は7,000円、高2は8,000円、そして高3は1万1,000円を望んでいる(P.11図6)。

③ 貯金額

個人差は大きいですが、平均すると8万円近くを貯金している(P.15表4)。

④ 金の貸し借り

中学生の500円くらいから高校生の1,000円へ、友だちと貸し借りをする金額がふえる(P.19図12)。

⑤ カード

カードを持っている者は34.0%で、銀行のキャッシュカードを持つ者が多い(P.22表9)。

⑥ 通信販売

通信販売をよく利用している生徒はほぼ1割で、利用したことのない者(「知らない」を含めて)は59.2%である(P.24表12)。

⑦ アルバイト体験

アルバイトをしたことのある者は34.3%で、学年が上がるにつれて、アルバイトをしている者がふえる(P.25図16)。

⑧ アルバイトの時給

500円くらいもらっているが、700～800円くらいほしい(P.28図21)。

⑨ 大金とは

1万円くらいから大金になる(P.32図25)。

⑩ 将来の見通し

大きな家に住み、海外旅行をする暮らしは無理かもしれないが、クーラーがあり、自家用車に乗る生活は可能だろう(P.36図30)。

まとめ

高1から高3へ進むにつれて、生徒たちはおとなと同じような金銭観を持ち始める。そして、こづかいの額も月額4,000円から6,000円くらいにふえる。そして、1万円くらいからが大金という感じになる。さらに、アルバイトをする生徒も少なくない。そうした形で金銭にとりかこまれているのに、学校ではアルバイトを禁止している場合が多い。生徒たちの金銭観を健全な形で育てるのも、学校のひとつの役割であろう。

そうした意味では金銭感覚を身につけさせる教育も、生徒指導の大きな課題となるように考えられる。

〔調査概要〕

対象●東京都近郊の4高校

時期●1988年11月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成 (人)

学年 性別	高1	高2	高3	計
男子	455	550	123	1,128
女子	345	486	97	928
計	800	1,036	220	2,056

第 I 章 テーマ設定



金銭にかこまれた生活

豊かな社会が到来したといわれる。土地代や家賃の値上がりが目につくので庶民の生活感覚からすると、それほど豊かとは思えない。しかし、それでも不足感を持たないですむから、貧しくないという意味での豊かさなのかもしれない。

そこで問題となるのは、そうした豊かさが子どもの人間形成にどのような影響をもたらすかであろう。人気のあるテレビゲームのソフトが発売されると、何千円もするのに子どもたちの列ができる。あるいは、コマーシャルでヒットしたスナックを買う。この場合は、1日だけならたいした額でないが、毎日1個ずつが10日近く続くと、これも無視できなくなる。

そこで、あらためて子どもたちが金銭にどの程度とりかこまれているのか、その実態を正確にとらえることが必要となる。東京近郊の小学4～6年生を対象として、子どもたちの金銭感覚について調査したことがある。その結果によると、1か月のこづかい額は平均して1,000円前後で、思ったより高額でないように見える。しかし子どもたちは、文房具やおやつ、マンガ雑誌を求めるときに、こづかい以外に金銭をもらう場合が多い。したがって子どもたちのふところを通りすぎる現金は、こづかいの何倍かになろう。

それに加え正月が来ると、子どもたちはお年玉をもらう。その額は20,000円に達する。もちろん、子どもたちがそうした大金を使いきることはないから、そのうちのかなりは貯金にまわる。しかもお年玉は毎年もらうか

ら、貯金額は少しずつ増加していく。その結果、子どもの貯金額は12万円を超える。もちろんこれは、あくまで平均値なので、子どもたちの中には貯金が50万円を超える子も1割近くを占める。

さらに、自分用として子ども部屋に持っている物をまとめてみると、本棚やロッカー、百科事典など、リストアップしてみると、あるのが当然のように思うが、それでもこうしたデータを重ね合わせていくと、あらためて子どもたちが物質的な豊かさの中で生活しているのがわかる。

そして、そうした子どもたちが豊かさの中で中学校を終え、高校へ進学してくる。

子どもも働いていた

アジアの多くの国々に出かけると、現在でも働く子どもの姿に接する。NIES とよばれる韓国やシンガポールなどは別として、その他の国々では、小学校もモーニング、アフタヌーン、ナイトの三部制をとっていることが多く、そのナイトの学校へ就学できない子もまれではない。そして、行商をしたり、農作業を手伝ったりして、子どもたちが働いている。

そうした子どもを見るにつけ、少なくとも子ども時代は働かなくてすむ社会を築きたいと思う。子どもを貧しさから解放したいのである。

と言うときれいごとに思われがちだが、日本にしたところでほんの少し前まで、子どもたちが働いていたのは歴史の示すとおりである。

農商務省の編集した『職工事情』は、明治30年代の日本の労働事情を正確に伝える資料集として知られているが、その中に幼年工として、10歳前後の子が働いていた記録が残されている。そうした資料はその他にもさまざまな形で認められるが、無着成恭氏の優れた実践記録『山びこ学校』の中にも、子どもたちが貧しさに直面しつつ、たくましく生き抜こうとしている姿が描かれている。

江口江一君の「母の死とその後」は文部大臣賞をもらった作文だが、その一節を引用しておこう。

「僕の家は貧乏で、山元村の中でもいちばんくらい貧乏です。そして明日はお母さんの三十五日ですから、いろいろお母さんのことや家のことなど考えられてきてなりません」

父の死後、母も亡くなり、一家離散のときを迎える。あんなにまじめに働いていたのに、どうしてわが家の暮らしが苦しいのか。そうしたことから、村の貧しさがどうして生じるのか、その背景を考えていこうとする。

江口君の作文は村の生活をリアルにとらえようとしている点に優れているが、この作文に限らず、『山びこ学校』には働く子どもたちの姿が描かれている。そして、この作文の舞台となったのは山形県の山元村で、昭和25年前後である。その頃でも子どもたちは働いており、都市部では新聞配達や納豆売りなどをして家計を助けている子は少なくなかったのは、史実の示すとおりである。

そう考えてくると、日本の子どもたちが貧しさから解放されたことを高く評価したいと思うが、その結果、金銭のありがたみがわからないという新しい問題が生じている。

経済的社会化という考え方

金銭に象徴されるような経済についての感覚をいかに身につけていくのかを経済的社会化(economical socialization)という。そして、お金のある暮らしをあたり前に思い、金銭の値打ちがわからないのが、日本の子どもたちの経済的な社会化を特徴づけているものなのであろう。

なにしろ子どもたちは、1円も自分の手がかせいだことがないのに、こづかいやお年玉の形で金銭を手に入れている。そして、テレビゲームのソフトやマンガ雑誌などを購入する。つまり、労働に従事して賃金を得ることなしに、完全な消費者として成長してくる。したがって1,000円の値打ちは自分で働いたときの何時間分の労働に相当するとして判断する

のでなく、マンガ雑誌何冊分というように、物をどの程度求められるかという基準として意味を持つことになる。

アメリカのワシントン州で小学高学年生に調査を実施する機会があった。その中で、「賃金をもらった」(原文では get a job) 経験をたずねてみた。その結果によると3分の1の子が「働いたことがある」と答えており、時給は1ドル強だという。

たしかにアメリカでは、芝刈りやペンキ塗りなどをして現金を手に入れている子どもを見かけるし、中学生ともなると、ベビーシッターやお店の売り子、ガソリンスタンドのサービス係などの形で、仕事をしている子は少なくない。

アメリカの大学生は、富裕な家庭の子どもでも、自分の手で学費をかせぐ。だから6月に入ると、キャンパスがからっぽになる。そして、9月になると、彼らはかせいだ金をふところに、新学期を迎えるためにキャンパスに戻ってくる。しかし日本の大学生は、親からの仕送りをあてにし、アルバイトで得た収入は生活費でなしに、レジャー資金となることが多い。

日米の学生の金銭感覚の違いも、経済的な

社会化の観点からすると、背景を理解できるように思う。いずれにせよ、豊かな社会が到来し、金銭の大事さのわかりにくい時代だけに、子どもたちに金銭の大事さをどう教えたらよいか、新しい課題となりつつある。その際にはアメリカのように、貧しさとは別の問題として、子どもたちに金銭的な自立を促すために労働を体験させることも必要となつてこよう。

学校でも、学業成績が一定水準以上の者、そして部活動に参加している者などの条件をつけ、雇い主と十分に話し合いを持った上で、夏や冬の休みに子どもたちの就労を認めることも必要なのかもしれない。いずれにせよ、金銭観の問題は、子どもの教育を考えるにあたっての新しい課題を提起している。しかもこれからの社会で金銭抜きの生活が考えられず、それに加えキャッシュレスのような複雑な条件が重なる。さらに、儉約を美德という考え方も有効性を失いつつある。それだけに金銭との付き合い方をいかに教育していくのかは、新しくてむずかしいが、しかしチャレンジしがいのある教育課題のように思われてならない。

第II章 金銭とのかかわり



1. こづかいの額

調査に協力してくれたサンプルの概要を図1、表1に示した。運動部に積極的に参加し、そして、将来4年制大学へ進みたいと思っている生徒たちで、ごく標準的な高校生である。

それでは、そうした高校生たちがどのような経済生活を送っているか。まず、こづかいの額からスタートすることにしよう。

図2のように、生徒たちは平均して5,000円前後のこづかいを手に入れている。なお、子どもの金銭観については、このシリーズの中でも「中学生の金銭感覚」(『モノグラフ・中学生の世界』(vol.31, 1989年2月)でもとりあげているので、中学生と対比させて、高校生の金銭観をつかむことができる。以下の分析にあたっ

ても、中学生のデータとの比較を行うことにしたい。

小学4年生から中学生、そして高校生と成長するにつれて、こづかいの額が1,000円台から2,000円、そして5,000円と上がっているのがわかる(図3)。もちろん、子どもも成長し、行動半径も広がっているのであるから、こづかいの額が多くなるのは当然であろう。

なお、1か月に使う額は図4のようにほぼ4,000円くらいであるが、もちろん、それでは不足気味になる。したがって、できることなら1万円、少なくとも月に7,000円くらいはほしいと生徒たちは考えている(図5)。

実際のこづかいの額と希望とを対比させて

まとめると、図6のとおりとなる。高1は7,000円、高2は8,000円、そして高3は1万1,000円を望んでいる。学年が上がるにつれて、生徒たちのほしい物がふえるのであろうか。

もっとも図7からうかがえるように、こづ

かいで生徒たちが求めているものはマンガやカセット、友だちへのプレゼント、あるいは、友だちとのつき合いなどと多様で、そうなるにつれ、こづかいは1万円でも足りなくなるのかもしれない。

図1 部活動

——熱心に部活——

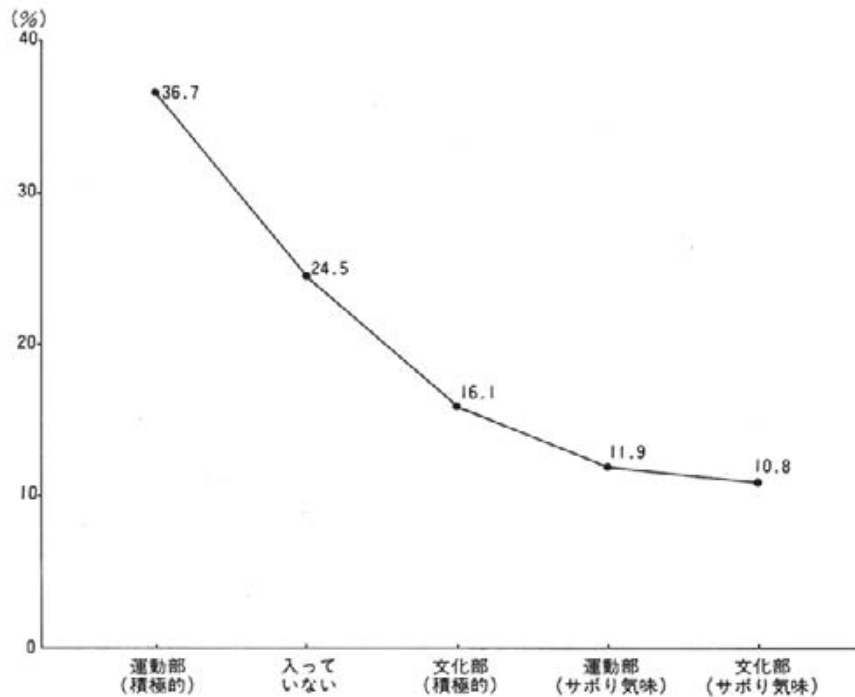


表1 将来の進路

——大学進学が5割——

	大学進学が5割 (%)		
	全体	男子	女子
まままあの4年制大学	54.0	61.7	44.5
むずかしい4年制大学	24.2	30.3	16.7
短期大学	11.8	0.9	25.3
専修・専門学校	5.7	3.0	9.0
高校まで	4.3	4.1	4.5

図2 1か月のこづかい

—5000～6000円—

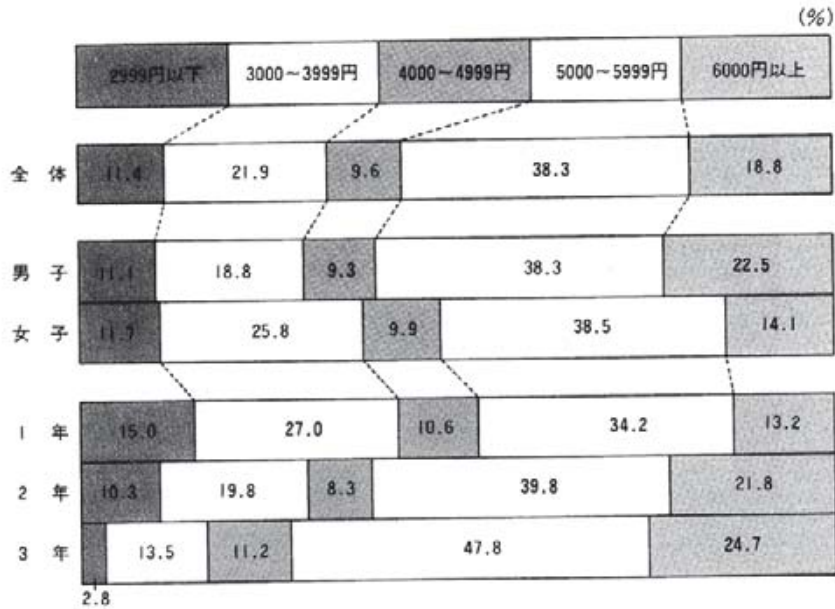
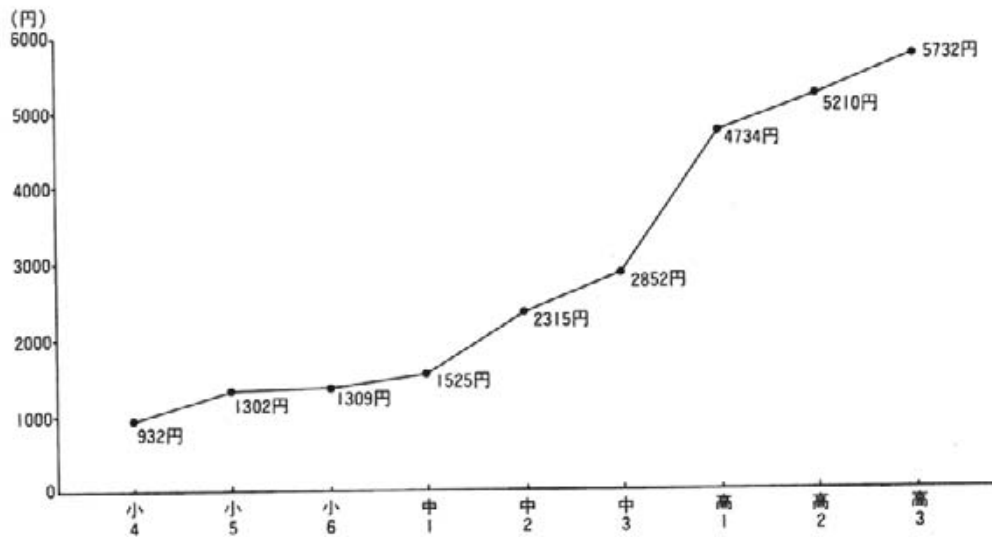


図3 こづかいの額×学年



注：中学生のデータは「中学生の金銭感覚」(「モノグラフ・中学生の世界」vol.31)による。(以下同)

図4 1か月に使う額

— ほぼ4000円 —

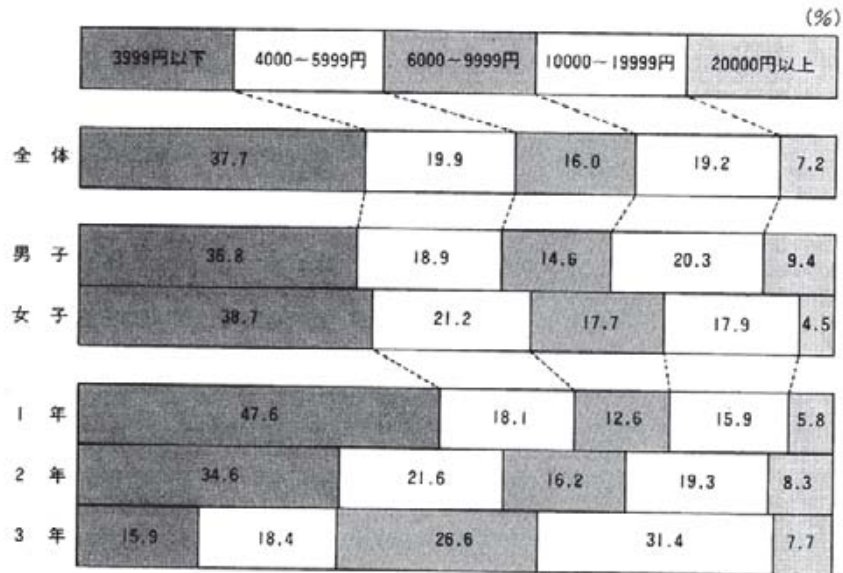


図5 実際いくらほしいか

— 1万円ぐらいほしい —

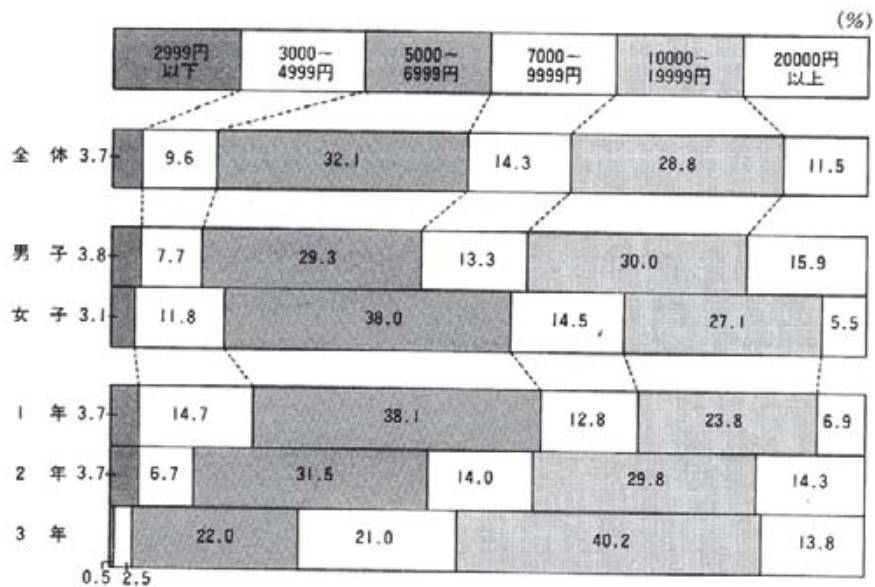


図6 こづかいの現状と希望

——高3は1万円——

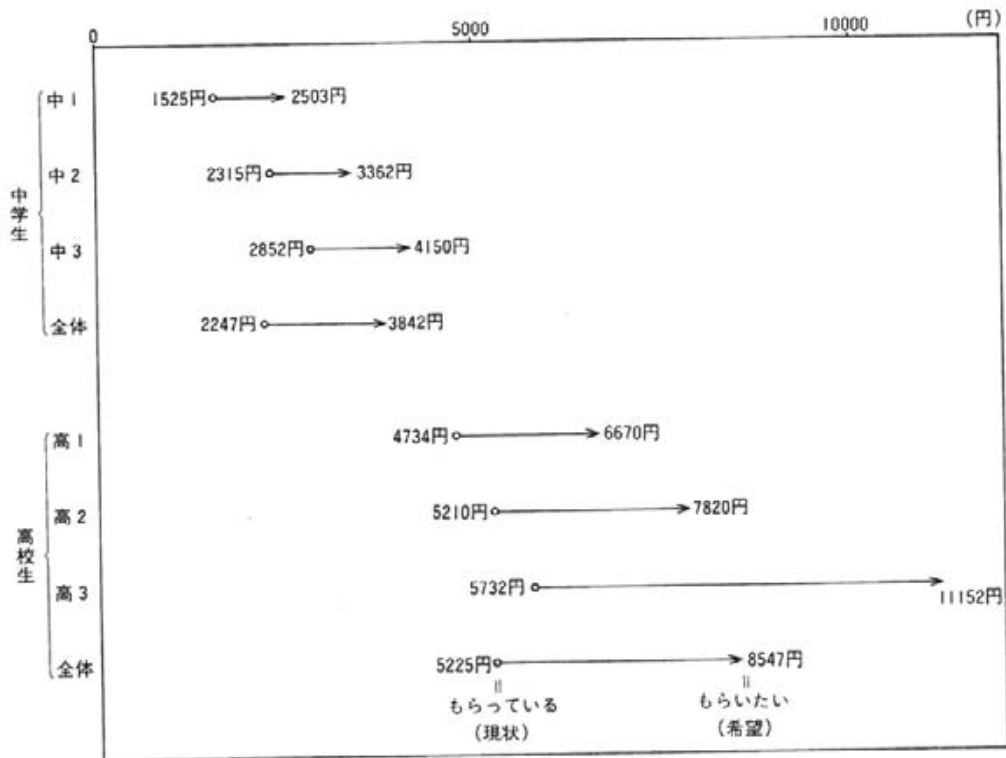
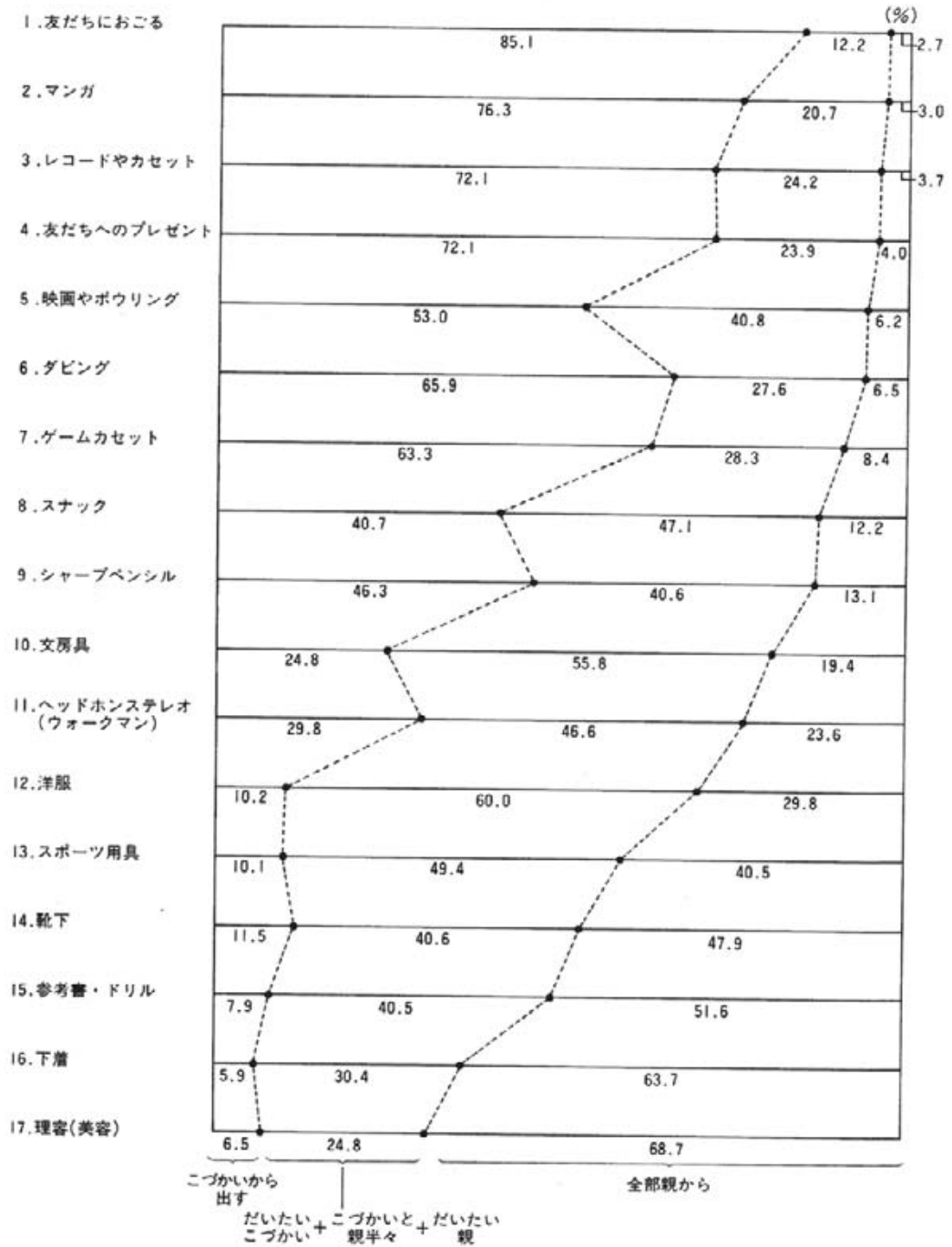


図7 こづかいで求めるもの

—多様な使いみち—



2. 貯金の額

中学生の頃とことなり、生徒たちは5,000円以上も使っている。それだけに計画的に金銭を使うことが望まれよう。そこで、こづかい帳をつけているかどうかたずねてみた。「つけている」者は5.6%で、「つけていない」者が86.2%と、ほぼ9割に迫っている(表2)。

しかも図8に示したように、中学生のうちは、それでも1割の生徒がこづかい帳をつけている。ということは、高校生は使うお金が

ふえてはいるが、こづかい帳をつけるのはめんどくさいというのであろうか。もっとも少数ながら、こづかい帳をつけている生徒がいるのはすでにふれたとおりだが、そうした生徒は、こづかい帳をつけると、お金を大切に使うようになるから便利だという(表3)。

しかし、生徒たちは全体として、かなり無造作にお金を使っているように見える。もっとも、多くの生徒たちは10万円前後の貯金を

表2 こづかい帳をつけているか

—つけていない86%—

(%)

		つけている	つけたり つけなかったり	つけていない
学 年 別	1 年	5.2	8.4	86.4
	2 年	6.1	8.1	85.8
	3 年	4.6	7.8	87.6
性 別	男 子	2.9	3.9	93.2
	女 子	8.8	13.3	77.9
全 体		5.6	8.2	86.2

図8 こづかい帳(中学生との対比)

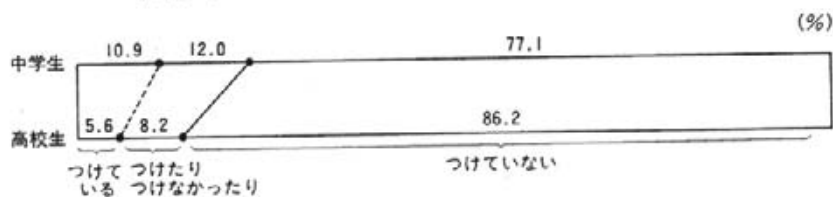


表3 こづかい帳をつける理由

—つけると便利—

(%)

	全 体	性 別	
		男 子	女 子
こづかい帳をつけていると便利だから	43.8	37.7	46.5
お金を大切に使いたいから	40.2	40.2	40.1
家の人がつけないとうるさく言うから	15.2	19.5	13.4
学校で先生につけるように言われたから	0.8	2.6	0.0

している(表4)。なお、貯金額は図9のように個人差が大きく、ほとんど貯金していない生徒から20万円以上の者までちらばっている。

そして、小学生からの貯金の額の変化をまとめてみると興味深いことに、小学生がもっとも金持ちで、中学生になると貯金額がへる。中学生になったときに記念に何かを買ったのであろうか。そして、高校生では高1がもっとも貯金額が多くて10万円、しかし、高2は9万円、高3は7万円で、学年が上がるにつれて、貯金額が減少している(図10)。

学年が上がるにつれ、金銭を使う機会がふ

え、こづかいの額が増加するが、それでは足りず、貯金をおろして使っているのであろうか。

そうした推定が間違っていない証拠に、図11(表5)によれば、高3の生徒の中で「貯金をおろしたことのない」者は2割で、「ときどき」の36.0%を含めて、5割以上の生徒が貯金をおろしていると答えている。

高校生といっても、高1と高3では、金銭とのつき合い方に開きが認められる。中学生と同じように、金銭をあまり使わない高1からおとなと同じように、金銭を使い始める高3へという変化である。

表4 貯金の額

——20万円以上の者も2割——

(%)

		3万円未満	3万～ 6万円未満	6万～ 10万円未満	10万～ 20万円未満	20万円以上
学年別	1年	19.7	16.6	12.9	28.2	22.6
	2年	21.7	18.7	11.6	24.3	23.7
	3年	38.2	25.0	4.7	13.3	18.8
性別	男子	24.7	17.3	11.3	25.4	21.3
	女子	20.0	20.0	11.6	23.7	24.7
全体		22.6	18.5	11.4	24.7	22.8

図9 貯金の額×学年

——個人差が大きい——

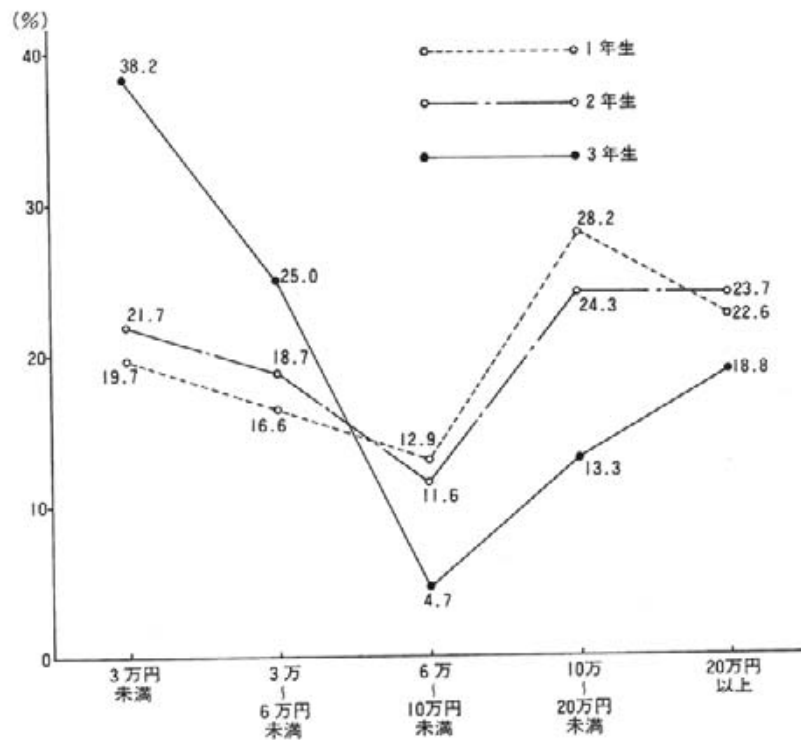


図10 貯金の額×学年(小学生～高校生)

—学年が上がると減少—

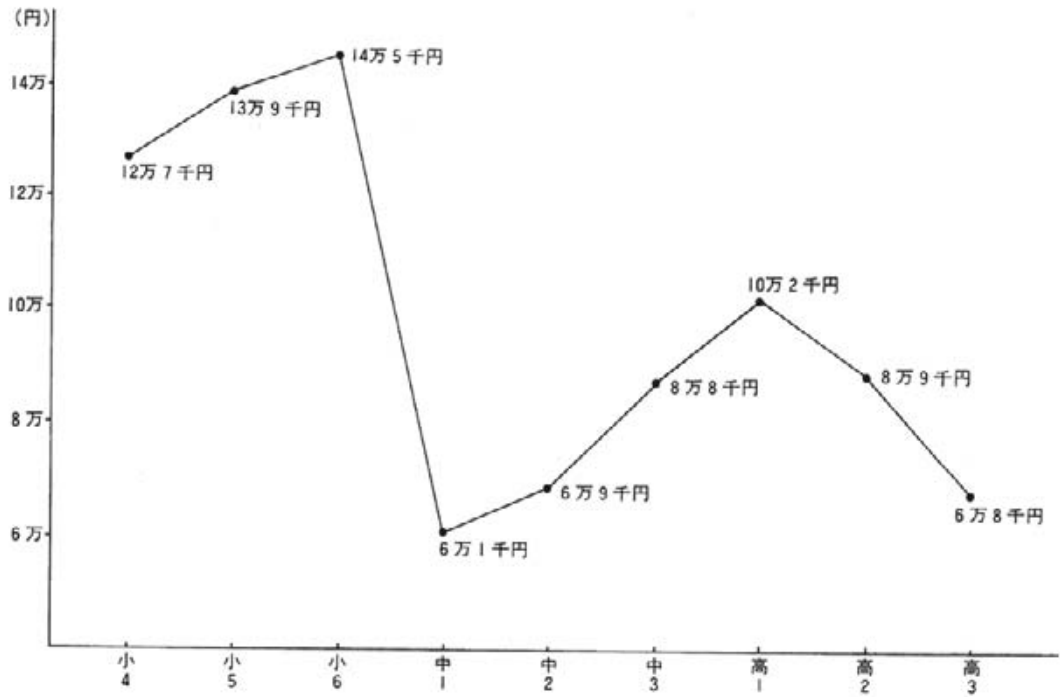


図11 貯金をおろしたこと×学年

— 高3はおろす —

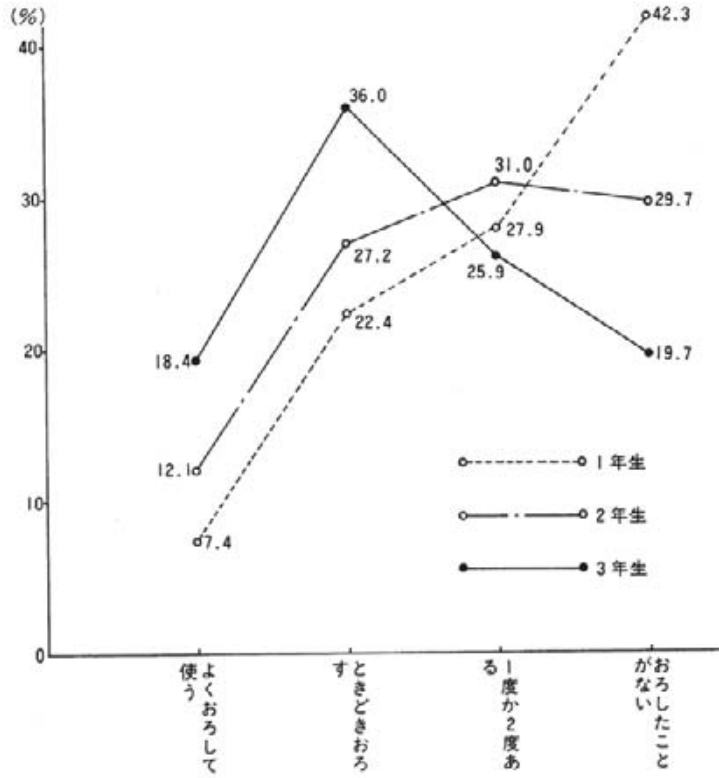


表5 貯金をおろしたこと

— あまりおろさない —

(%)

		よくおろして使う	ときどきおろす	1度か2度ある	おろしたことがない
学年別	1年	7.4	22.4	27.9	42.3
	2年	12.1	27.2	31.0	29.7
	3年	18.4	36.0	25.9	19.7
性別	男子	13.8	28.3	28.8	29.1
	女子	7.6	23.9	29.6	38.9
全体		10.9	26.2	29.2	33.7

第三章 金銭とのふれ合い



1. 金銭の貸し借り

高校生たちは5,000円から1万円くらいの金銭を使っている。そうした中から、現代の高校生らしい金銭感覚が育ってこよう。

そこで、まず金銭の貸し借りについての感覚を示すと、表6のように1,000円ぐらいならよいのではないかという。つまり、中学生のうち友だちとの貸し借りは、せいぜい500円までだったのに、高校生になると1,000円札1枚程度という感覚が育ってくる(図12)。

100円玉をひとつかふたつだと貸したとき返してもらいにくい。かえって、1,000円札のほうが貸した気持ち、あるいは、借りた気持ちがするであろう。

実際に、返してもらうのをだましている金額は200～300円までで、500円ぐらいからの金銭をだましている者は2割くらいにとどまっている(表7)。

なお、家の手伝いなどをしてほうびとして金銭を手にしたとき、100円ではなんとも安すぎるという(表8、図13)。

ファーストフード・レストランなどの時給案内を見ると、500円、あるいは600円などが目につく。1時間働くと500円なのだとしたら、100円では10分ぐらいの労働で、これでは金銭をもらった気持ちがしないのであろう。

表6 お金の貸し借り

(%)

			たとえいくらでも貸す(借りる)のはよくない	100円くらいならいい	200-300円くらいならいい	500円くらいならいい	1000円くらいならいい	2000-3000円くらいならいい	5000円以上でもいい
貸す	学年別	1年	2.9	4.5	10.8	30.1	38.2	9.1	4.4
		2年	3.2	3.6	6.7	20.3	40.0	16.5	9.7
		3年	4.6	1.8	4.1	16.1	45.9	17.9	9.6
	性別	男子	4.8	4.4	7.4	20.9	37.3	14.4	10.8
		女子	1.3	2.9	8.9	26.9	43.3	13.0	3.7
	全体		3.2	3.8	8.0	23.6	40.1	13.7	7.6
借りる	学年別	1年	6.3	5.9	19.1	32.0	28.1	4.1	4.5
		2年	7.0	5.2	11.5	23.7	33.0	11.2	8.4
		3年	7.3	1.8	9.6	26.5	38.0	10.0	6.8
	性別	男子	7.9	4.7	11.5	21.7	32.6	10.9	10.7
		女子	5.3	5.7	17.7	34.0	30.4	5.1	1.8
	全体		6.7	5.2	14.3	27.2	31.6	8.3	6.7

○ = 最大値

図12 金銭の貸し借り(中学生との対比)

——500円から1000円へ——

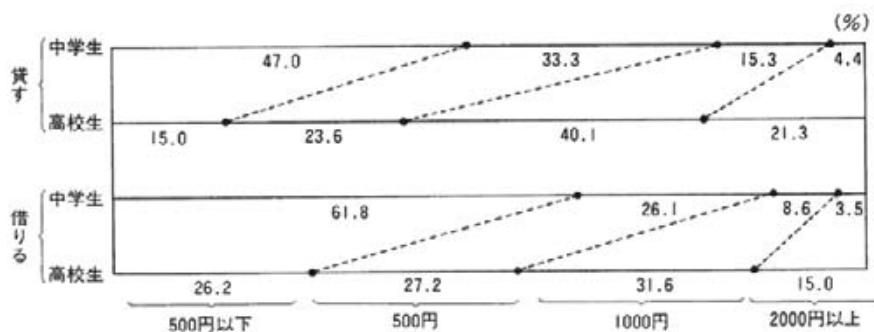


表7 返してもらうのを「だまっている」額

—200～300円まで—

(%)

		どんなに少 なくても返 してもらう	100円くらい ならいい	200～300円 くらいなら いい	500円くらい ならいい	1000円くら いならいい	2000～3000 円くらいな らいい	5000円以上 でもいい
学 年 別	1 年	27.3	34.0	26.1	9.5	2.3	0.3	0.5
	2 年	23.0	26.9	25.3	15.6	6.0	1.0	2.2
	3 年	22.3	25.4	23.2	19.1	5.9	2.3	1.8
性 別	男 子	27.9	26.6	21.5	14.6	6.0	1.2	2.2
	女 子	20.5	33.1	30.3	12.4	2.7	0.4	0.6
全 体		24.6	29.6	25.4	13.6	4.5	0.8	1.5

表8 これっぽっちと思うほうびの額

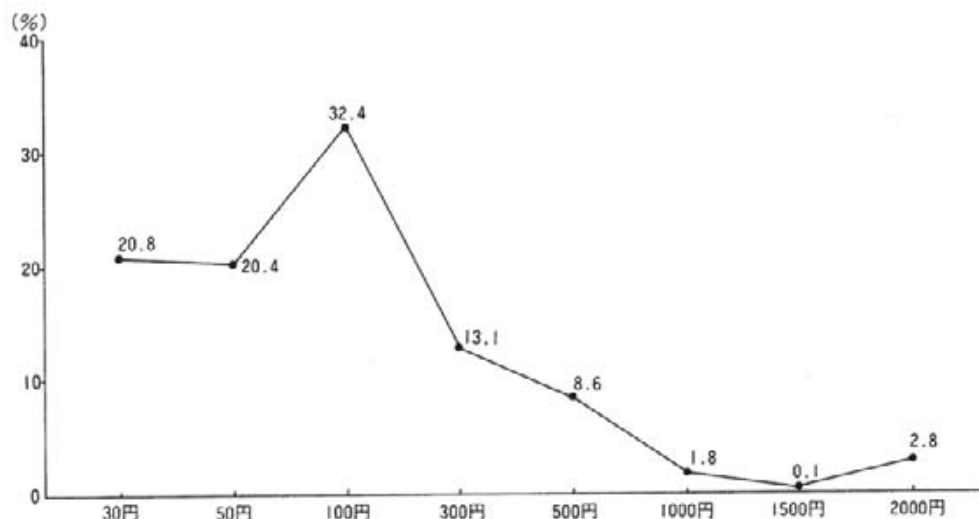
—100円くらいは安い—

(%)

		30円 くらい	50円 くらい	100円 くらい	300円 くらい	500円 くらい	1000円 くらい	1500円 くらい	2000円 くらい
学 年 別	1 年	22.3	22.9	32.9	11.8	6.7	1.5	0.0	1.9
	2 年	19.4	19.9	30.8	13.5	10.3	2.0	0.3	3.8
	3 年	22.2	13.2	37.8	16.0	8.0	1.4	0.0	1.4
性 別	男 子	21.8	18.5	33.0	11.4	8.9	1.8	0.1	4.5
	女 子	19.5	22.6	31.7	15.1	8.3	1.8	0.2	0.8
全 体		20.8	20.4	32.4	13.1	8.6	1.8	0.1	2.8

図13 少ないと思うほうびの額

—100円は少ない—



2. カードや通信販売

中学生とことなり、高校生は電車やバスに乗って登下校するから、さまざまな形で金銭を使う機会がふえる。それと同時に、高校生としての関心が広がり、さまざまなものを求めたい気持ちになる。

図14に一例を示したように、カセットやスポーツ用品など、ほしい物が多いが、ちょっとがまんしているという。

たしかに、ほしい物を手に入れていたのではいくら金銭を持っていても十分ということはあるまい。幸か不幸か、このところ生徒たちの間で、カードを持つ者が多い。それに、通信販売を利用している者も少なくないという。

生徒たちが、現在の商品流通機構にまきこまれているのである。

そこで念のために、カードの有無をたしかめると表9のように、カードを持っている者はほぼ3分の1にとどまっている。またカー

ドの種類別では銀行のキャッシュカードが多い(表10)。そして、こづかいが不足したり、高い物を買うときにカードを利用するという(表11)。

先ほどのデータの中で、高3の貯金額が少なかった。ほしいものがあるとき、貯金をおろすのであろうが、そうした折、キャッシュカードを利用するのか、表10のようなデータとなる。

もちろん、カードの他にも、通信販売を利用する生徒がいると思われるので、そのデータを紹介すると図15(表12)となる。

中学生の場合、通信販売を知らない者が1割、「利用したことがない」が6割に達するが、高校生になると、それほど数は多くはないが、利用者が増加してくる。なお、生徒たちによると、通信販売を利用しているのは靴下や下着などだという(表13)。

図14 ほしい物の買い方

—— ちよつとがまんする ——

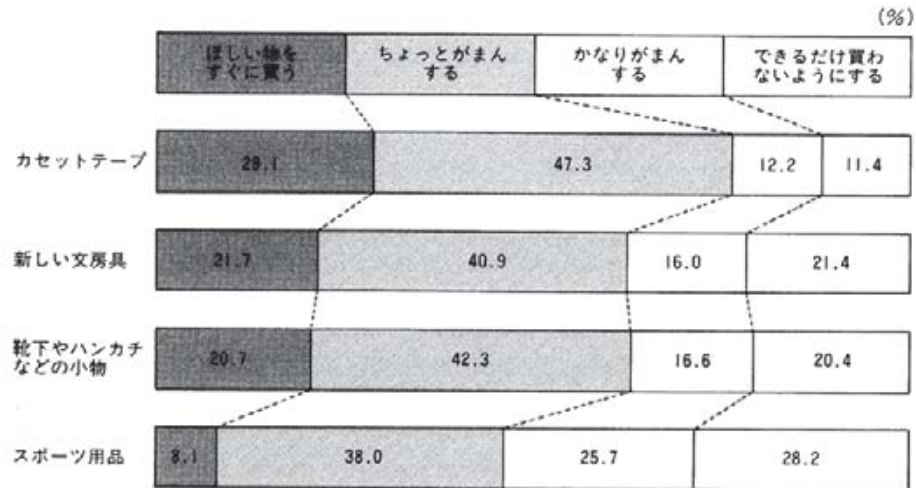


表9 カードを持っているか

—— ほぼ3分の1 ——

(%)

		持っている
学年別	1 年	31.2
	2 年	34.2
	3 年	43.4
性別	男子	37.6
	女子	29.7
全 体		34.0

表10 カードの種類

— キャッシュカード —

(%)

	全 体	性 別		学 年 別		
		男 子	女 子	1 年	2 年	3 年
銀行のキャッシュカード	24.5	24.8	24.1	19.6	25.7	36.8
デパートなどのカード	3.7	4.9	2.3	3.5	4.2	2.3
クレジットカード	1.1	1.9	0.2	1.1	1.2	0.9
その他	9.8	13.4	5.5	10.9	9.2	9.1

(生徒全体を100%として。ただしカードを持っている者は34.0%)

表11 カードをいつ使うか

(%)

月々のこづかいが不足したとき	24.7
高い物を買うとき	22.4
急にほしい物があるとき	21.5
分割払いをするとき	1.1
その他	30.3

(生徒全体を100%として。ただしカードを持っている者は34.0%)

図15 通信販売

— 利用が4割 —

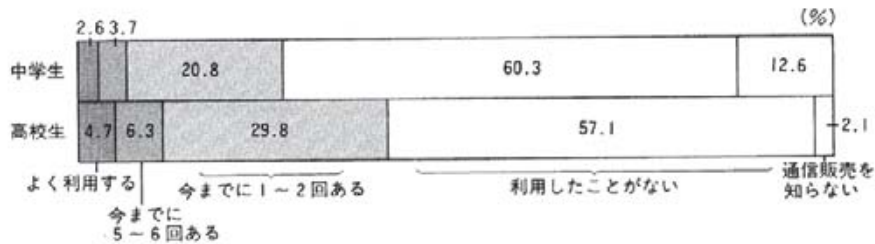


表12 通信販売

—女子のほうを利用—

(%)

		よく利用する	今までに 5～6回ある	今までに 1～2回ある	利用した ことがない	通信販売を 知らない
学 年 別	1 年	4.7	7.7	32.4	53.2	2.0
	2 年	5.2	5.9	29.0	57.9	2.0
	3 年	2.3	3.2	24.7	67.5	2.3
性 別	男 子	3.5	5.8	26.6	61.1	3.0
	女 子	6.2	6.9	33.8	52.2	0.9
全 体		4.7	6.3	29.8	57.1	2.1

表13 通信販売を利用して買った物

(%)

	高 校 生	中 学 生
靴下(ストッキング)	10.7	4.7
下着など	8.2	4.6
Tシャツ	5.4	1.8
文房具	5.0	5.5
ブラウス	1.7	1.3
ズボン	1.1	1.1
学生服、上衣	0.9	0.9
ワイシャツ	0.3	1.0
ベルト	0.2	0.5
その他	25.7	47.6

3. アルバイト

これまでふれてきたのは、主として、消費者として金銭を使う場合であった。冒頭でふれたように、金銭感覚は金銭をかせぐのと金銭を使うのとのバランスの上に成り立つのが健全な感覚であろう。しかし、多くの学校ではアルバイトを禁止しており、たてまえの上では、生徒たちは金銭をかせぐ体験を持たずに高校を終えることになる。

もっとも、ファーストフード・レストランなどに入ると、高校生ぐらいと思われる子が働いているのを見かける。けっこうまじめに働いているのであるから、やめさせる必要もない。ただ、アルバイト禁止のたてまえと現実とのギャップを感じ、一定の条件をつけた上でアルバイト解禁に踏み切ったらどうかと思う。

そうした考察はともあれ、実際にアルバイトをしている者は、図16のように34.3%に達

する。しかも、高1=20.9%、高2=40.1%、高3=56.0%と、学年が上がるにつれてアルバイトをしている者の割合が増す(図17)。

こうしたデータを手にすると、高校生にとっては、アルバイトをする生徒が例外でなくなりつつあるのがわかる。もっとも、7割近くの生徒(図18)、特に女子の84.9%は高校に入ってからアルバイトを始めた(図19)。そして、休みの期間にした生徒が多いという(図20)。

なお、アルバイトの時給は500円が多いが(表14)、もしもらえるなら700~800円もらいたいというのが生徒たちの心のうちとなる(図21)。たしかにアルバイトの求人広告などを見ていると、700~800円の時給が少なくない。したがって、生徒たちの望みも、それほど高すぎず、むしろ納得できる数値のようにも思う。

図16 アルバイトをしたことがある割合

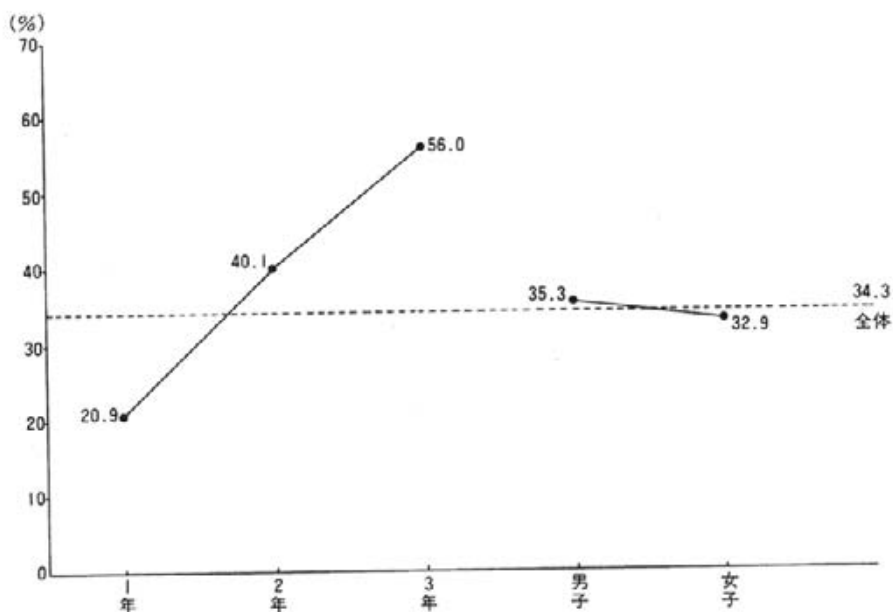


図17 アルバイトをしたことがある割合（中学生との対比）

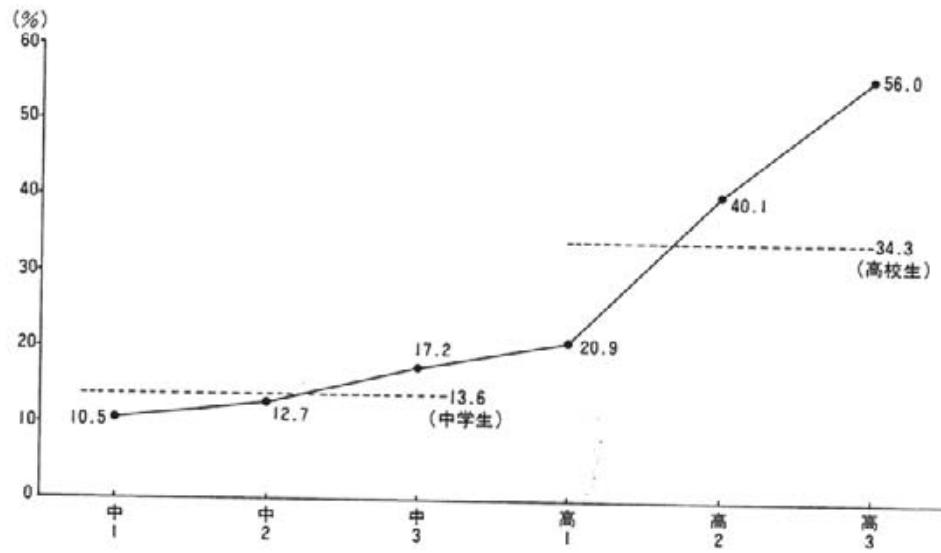


図18 初めてのアルバイト

—— 高校生になってから ——

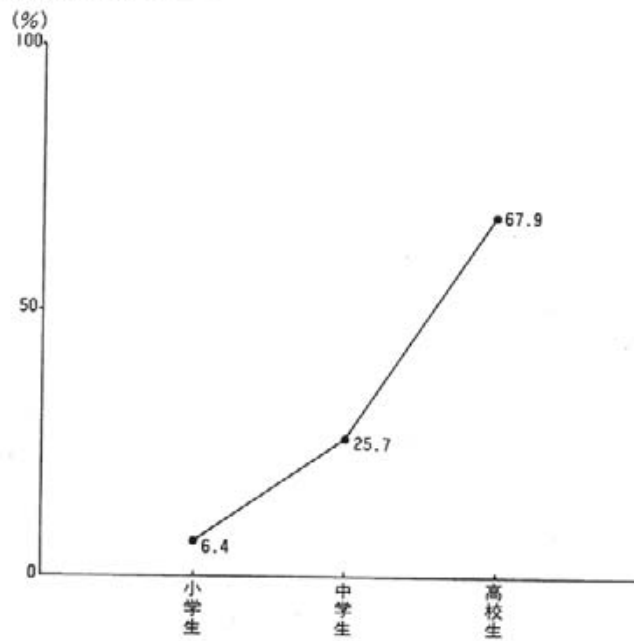


図19 初めてのアルバイト×性別

——女子は高校に入ってから——

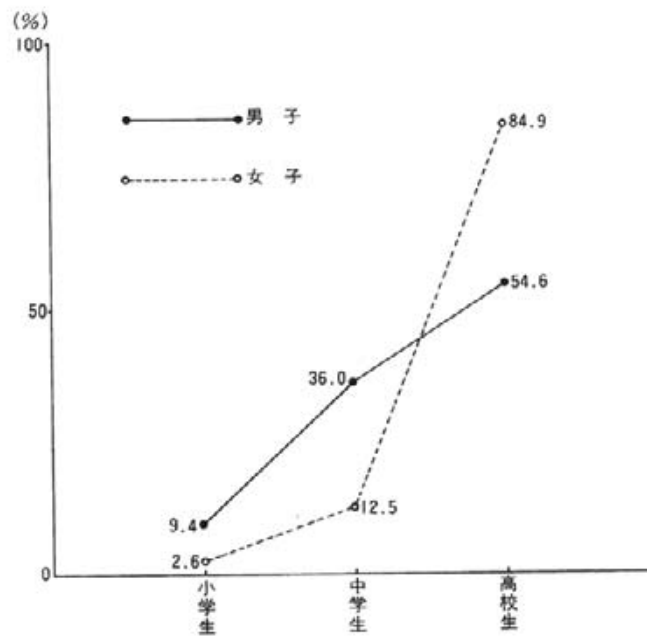


図20 長く続いたアルバイトの時期

——休みの期間——

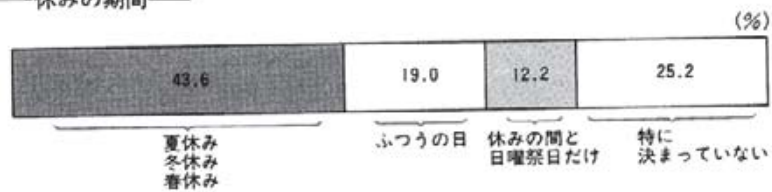


表14 アルバイトの時給

—時給500円—

(%)

		1時間働いて							
		200円以下	300円	400円	500円	600円	700～800円	1000円	2000円以上
もらえるか	ファーストフードショップのカウンターで働く	1.8	5.6	24.9	42.6	18.1	5.1	0.9	1.0
	郵便局などでハガキをやりわたる	2.3	9.2	24.9	34.8	18.9	7.2	1.5	1.2
	お菓子屋や文具店で店を手伝う	4.0	12.0	34.9	33.4	11.2	3.1	0.4	1.0
	スーパーマーケットのレジをする	1.3	5.2	20.6	42.4	20.4	7.5	1.5	1.1

(%)

		1時間働いて					
		300円くらい でよい	500円くらい	700～800円 くらい	1000円 くらい	2000円 くらい	3000円 以上
もらいたい	ファーストフードショップのカウンターで働く	1.7	35.7	42.0	9.3	0.8	10.5
	郵便局などでハガキをやりわたる	3.0	34.8	38.4	11.7	1.6	10.5
	お菓子屋や文具店で店を手伝う	5.1	43.3	32.6	7.7	0.9	10.4
	スーパーマーケットのレジをする	1.3	28.3	44.5	13.4	1.8	10.7

図21 アルバイトの賃金

—もらうのは700～800円—

